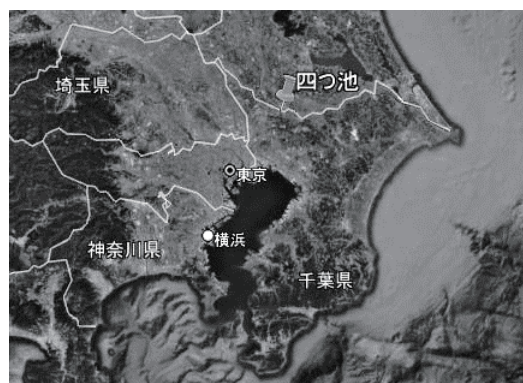


持続可能な氾濫原【四つ池】の生態系 NbS (Naturebased Solutions)

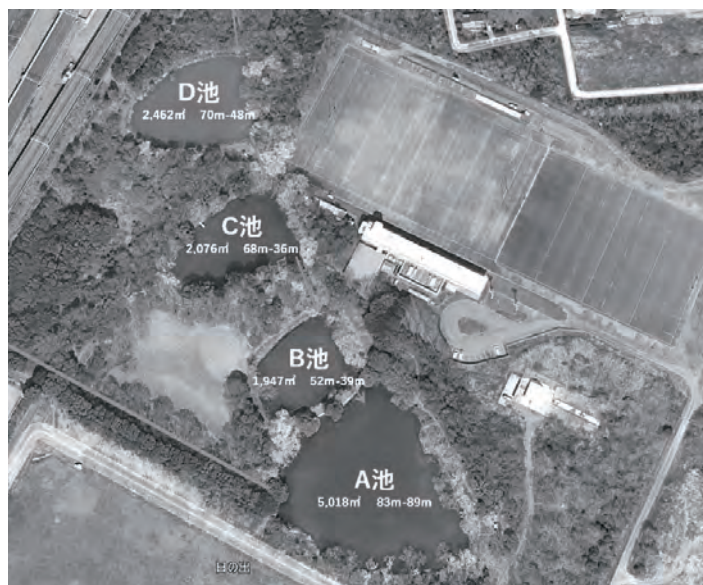
鈴木 盛智

(手賀沼水生生物研究会)

【四つ池】湧水池は、千葉県北西部に位置し、利根川と手賀沼の間の我孫子市にあります。利根川流域にある氾濫原で、古利根川の一部が湧水池として残ったものと考えられています。手賀沼水生生物研究会では、NEC我孫子事業場内にある湧水池（4つの池、通称A池～D池）で、これまで16年間、外来魚駆除と、希少トンボほか在来生物の保全に取り組んで来ました。活動継続の努力が評価の対象となり、いくつかの賞も受賞することもでき、昨年国の「自然共生サイト」に【四つ池】が認定されました。



【四つ池】には、侵略的外来種5種のオオクチバス、ブルーギル、アメリカザリガニ、ウシガエル、ミシシippアカミミガメが、手水研が調査に入る2007年以前から生息しています。外来魚の食害のリスク管理の観点から、2012年11月と2019年2月に2度の池干しを実施しました。しかし近年の異常気象で、2013年から2023年の間に3回の冠水があり、完全駆除をした上流の池に三度外来魚の侵入を許す事例が発生しました。2020年のパンデミック



による活動自粛によるリバウンドでは予想以上となり、外来魚のリスク管理(特にブルーギル)の作業努力がなかなか恵まれない状況が続いています。

そのため、今後数年おきに氾濫原で冠水が起きることを想定し、冠水は、外来魚の侵入という負の面だけを嘆くのではなく、水環境の攪乱という、池の環境を活性化する作用もまた期待できる良い面に焦点を当てた対策ができるようにしていきたいと思えます。

ネイチャーポジティブというキーワードを旗印にした「自然共生サイト」の経済移行戦略は、企業が生物多様性を環境保全のテーマとしてだけで考えるのではなく、生物多様性を回復軌道に乗せるための仕組みづくりの中に入ることを意味します。自然がもつ本来の力を引き出すことを調査し、それを数値化できれば、それによる持続可能性を高めることも可能になります。

新たな価値を生み出すNbS (Naturebased Solutions) というアプローチに大きな期待を寄せます。